



万年ピッチャーの配慮

村田修子

野球に興味を持ちはじめた少年ならば、誰しも一見派手にみえるピッチャーにあこがれることでしょう。これがプロの野球選手ともなれば、あんなにも苦勞の多い役割りよりは他のポジションを、と思うでしょうが……。

十月は「体育の日」もありますし、各種の行事に忙しくも楽しく過ごせるスポーツの月ですから、子どもたちがやる野球あそびのときに、いつも任命されるピッチャーとしての感慨など述べてみたいと思います。

野球といっても「野球もどき」で、子どもたちがテレビを見たり、兄弟たちから教えられたルールを持ち寄り、私も加わって作り上げた最低限のものです。

● 打ち易いたま(ストライク)を三回空振りしたら交代する。

- 打ったら一塁の方へ走っていく。
- 次の人が打ったらまた次の塁へ走る。
- 打つ人は順番にする。

概略このくらいのルールで始まりますが、ときをへるに従って本物らしいルールが次第に加えられてきます。先ず打つことが興味の中心ですから、常にピッチャーの役割を受持つ私は、よく当たるようなたまを投げてやります。

本当の野球なら、ストライク・ゾーンが決まっていますから、その範囲を目掛けて投げるわけですが、子どもたちはそれぞれバットを振る角度が違います。打つ構えはみな同じような姿勢をするのですが、その先、振るバットの通り道が違うのです。

外側を大きく回すひと、バットを横にねせるような形で振り回すひと、低い位置で振るひとなど、それぞれタイプが違うので、一球投げてみるとおおよそそのことが分かりますから、その振り方で当たり易いボールを投げてやるようにします。そうすると当たる率が大変に高くなります。

当たったときの子どもの喜びは大変なものようです。けれども打ったあと、二塁、三塁と走ってホームベースまで回ってくるので、活動が連続してきますから、どんなに喜んでいられるかをすぐその場で聞くことはできませんけれども、幼稚園でのこ

とを家庭で余り話さないひと、そのことについては報告するらしく、それについての反応を親から聞くことが多いので分かります。

子どもたちの様子もさまざまに楽しくなります。

● 当たったけれどもまごまごするひと。そのひとには「一塁、一塁」と励ましてあげます。

● 反対の塁の方へ走るひと。

● がんばって二塁、三塁、ホームへとがむしやらに走るひと。

● バットをはなさず持ったまま走り回るひと。

● 一塁に座りこんで、次のひとに追いこされるひと。

● 走りながら、自分の近くに来たボールを追いかけて取ってき
てくれるひと。

● 大当たりをされて遠くへいったボールを取りにいって帰って
きてみると、まだ塁の間を走っているの聞いてみると、「も
つたいないからもう二回まわっちゃったんだよ」とまじめな
顔でいうひと。

これには涙を流して笑いこぼしました。こういうときは楽しんで、何ともいえない幸福感にひたれるときです。全く子ども特有の型にはまらない発想です。

幼児の仕事にたずさわっているものは「細心の配慮が必要である」ということはよく耳にすることはですし、案をたてるときも、それを実践するときも、また指導する上での留意点などを考えるときにも必ず「配慮」ということを意識の中におきます。何をするにも忘れてはならないことなのです。

野球遊びについては、幸に私はボールを見る目があり、扱う要領が分かれますから、たまたまくる実習生などのピッチャーよりは認めてもらえているようですが、幅広い経験を必要とする「幼児の生活」では、私には分からない面で配慮しなければならぬ点を見のがしているために、子どもたちの意欲を盛り上げることができないことがたくさんあるのではないかしらと、いつも大勢の子どもたちを相手にただ一人ボールを投げていて、打たれたボールを追いかけながら思っているのです。

たまには私もバッターになりたい、と申し出るのですが、このピッチャーを必要とする子どもたちは仲々打たせてくれません。

「今日は打たしてくれるかな、そうしたらホームランを打つてやろう」と思いながら万年ピッチャーを務めています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)